

森博嗣

詩的私的

ジャック



それに、
人間大の物質に関する密室、
細菌大の物質に関する密室、
気体に対する密室、
電磁波に対する密室、
なども定義する必要があります。
外部からいかなる影響も
受けない部屋を作ることは
たぶん不可能です。

JACK
THE POETICAL
PRIVATE
Hiroshi
Mori

N. D. C. 913 332p 18cm

詩的私的ジャック

一九九七年一月五日 第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者—森博嗣

© HIROSHI MORI 1997 Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社



東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一一一〇一 編集部〇三・五三九五・三五六

販売部〇三・五三九五・三六二六

製作部〇三・五三九五・三六一五

印刷所—廣濟堂印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

詩的私的ジャック

林博嗣

YODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 熊谷博人
カバーデザイン 辰巳四郎

目次

第1章：最初の密室	10
第2章：第二の密室	44
第3章：解決のあとの未解決	69
第4章：昏睡する不安	96
第5章：追跡する疲労	124
第6章：第三の密室	151
第7章：失踪の夢	184
第8章：沈黙と混迷	213
第9章：思考の筋道	238
第10章：危険な真実	264
第11章：不快な真実	289
第12章：詩的なつづき	319

JACK THE POETICAL PRIVATE

by

Hiroshi Mori

1997

登場人物

国立N大学

ゆう き んのぶ
結城 稔-----ロック歌手

ゆう き ひろし
結城 寛-----理学部・大学院生、稔の兄

しの ぎき としはる
篠崎 敏治-----文学部・大学院生、稔の友人

さが ら よういち
相良 陽一-----工学部建築学科・教授

さいかわ そうへい
犀川 創平-----工学部建築学科・助教授

くに えだ ももこ
国枝 桃子-----工学部建築学科・助手

にし の その も え
西之園 萌絵-----工学部建築学科・3年生

まきの ようこ
牧野 洋子-----工学部建築学科・3年生

かね こ ゆうじ
金子 勇二-----工学部建築学科・3年生

私立S女子大

ふじ い のりこ
藤井 紀子-----家庭環境学科・助教授

すぎとう ちか
杉東 千佳-----家庭環境学科・助手、結城寛の妻

あい だ もとこ
相田 桑子-----国文学科・1年生、第二の被害者

私立T大学

まえかわ さとみ
前川 聡美-----経済学部・2年生、第一の被害者

はまぐち えつお
浜口 悦夫-----庶務係・技術員

ハイホー・ゴールド！ ハイホー・マネー！

洪水の夜にはもってこいのステップさ

詩的な君は、死んで、死んで！

顔を洗って一昨日おいで

なけなしのキッス！ 風に舞って

抜け駆けのキッス！ 夢に見るように

踏切に残るハイヒール

凍りついたシネマショー

あんなに柔かいサスペンション

ハイホー・ゴールド！ ハイホー・マネー！

殺人の夜にはもってこいのステップさ

私的な君は、死んで、死んで！

顔を洗って一昨日おいで

溶けだしたキッス！ 繰り返して

閉じこめたキッス！ 思い出すように

踏切に残るハイヒール

凍りついたシネマショー

もう動かないサスペンション

（エクспレッション／作詞：結城稔）

第1章 最初の密室

1

杉東千佳^{すぎとうちか}は、月曜日の朝、駐車場に自分の車を駐めた。

まだ、八時少しまえである。いつもより三十分ほど早い。駐車場は建物の両側にあり、今日は、いつもの北側ではなく、南側に駐車することができた。玄関に近い南側の駐車場は、彼女の平常の出勤時間ではいつも満車だったが、今日は、まだ一台もなかった。彼女より早く出勤した職員はいないようである。杉東は玄関に一番近い駐車スペースを選んだ。

車のドアを開けると、少し冷たい空気が暖かい日

差しと混じって気持ち良かった。時間が早いのは、学会のために出張する夫を地下鉄の駅まで送ってから出勤したためである。

助手席のデイバックを左肩に掛け、ドアを閉めてロックする。軟らかい人形の付いたキーホルダーを右手で握って、アスファルトの上を歩いた。澄み切った空気は固体のように静止している。キャンパスは静かだが、どこからともなく、朝の騒音が聞こえていた。

駐車場の周囲を取り囲んでいる芝生は濡れて光っている。杉東は、葉のついていない見窄^{みすぼ}らしい樹にかかっている白い名札を見た。毎日その名を見ているのに、彼女はそれが覚えられない。

その奥に小さなログハウスがあった。

ログハウスの積み重なった丸太は、白っぽい新しい樹の色である。一部屋しかない小さな小屋だった。その場所に、そんな建物が存在することは、見慣れない者の目にはかなり不自然に映るであろう。

キャンパスの近代的な建築物のどれとも、まったく馴染まない。それは、実は教材だった。キットとして購入されたもので、杉東の勤めるへ家庭環境学科の学生たちが昨年度、まる一年かけて演習として建てたものだった。

家庭環境学科は、このS女子大に三年まえに創設されたばかりで、もともとは家政科であった。女子大の存亡をかけて行われた大改革の産物である。ワシントン理事長の一存であったともいう。

杉東自身は、一年まえに東京の私大の建築学科で大学院修士課程を修了し、地元のS女子大に助手として赴任した。S女子大の理事長にちょっとしたコネがあったとはいえ、彼女にとってこの就職は幸運だった。最近の就職難にあつて、比較的受け入れ先が安定している建築業界でも、女子の採用は極端に減っていたからだ。

ピロティのタイルの上まで来て、建物の中に入ろうとしたとき、何かが目にとまって、もう一度ログ

ハウスを見た。ログハウスの中で何か光るものがあった。彼女は足を止めて、そちらをもう一度じっくりと見た。彼女の視力は決して良くない。

土曜日の夕方に帰るときに、四年生の数名がログハウスでゼミをしていたことを杉東は思い出した。彼女の講座の卒論生たちである。まだ、本格的に卒業研究が始まっているわけではない。三月に配属が決まって、一度だけ、顔合わせのコンパをしただけで、ゼミとはいっても、関連する英文の文献を読ませているだけである。ログハウスは、自習室、ゼミ室、会議室として、たまに学生たちに使われている。冷暖房がないので、冬や夏には人気がないが、その他の季節には比較的よく利用されていた。

彼女は、芝生を横切つてログハウスに近づく。

採光のための小さな嵌殺しの窓がドアの上にある。そこから、室内の高い天井にぶら下がっている白熱灯が見える位置まで彼女は来た。案の定、電灯がついたままだった。

ログハウスのドアを押したが、開かなかった。鍵は中からしかかからないはずである。まさか誰か中にいるのだろうか、と考えながら、彼女はログハウスの裏側に回った。ドアは西側で、反対の東側にだけ窓がある。

窓は閉まっけていて開かなかったが、部屋の中が見えた。

ずっと、血が顔面から下がる。

彼女は二、三步後退した。

持っていたデイパックが肩から芝生の上に落ちた。デイパックにはコンビニで買ってきたばかりのサンドイッチが入っている。

彼女は短い悲鳴を上げた。いや、瞬間的に吸い込んだ息で、喉が鳴っただけかもしれない。

もう一度、窓にゆっくりと近づいて、窓ガラスに手を触れる。

ガラス越しに、床に倒れている裸の女が見えた。マネキン人形のようなだった。

白い肌に一筋の赤いライン。
斜めに走る血のラインが見えた。

駐車場に車が入ってきたらしく、ドアの閉まる音がする。

杉東は、芝生の上に座り込んでしまっていた。足音が近づいてきても、夢の中のような遠い音に感じられる。

「杉東先生？ 先生、大丈夫ですか？」

その声も遠かった。杉東の目は、ただ地面の芝を見ているだけだった。

2

水曜日の正午過ぎ、犀川さいかわ創平は少し汗をかいていた。

地下鉄の星ヶ丘ほしか駅で降り、三越デパートを右手に、ボーリング場を左手に見ながら、長い真っ直ぐな坂を上る。S女子大の小さなキャンパスがその丘

の上にあった。

坂を上りきったところから、キャンパスに入るためにまた少し急なスロープを上らなくてはならない。女子大らしい小綺麗なキャンパス。小さな駐車場。まだ若い植木。数本だけある桜はもう散っていて、黒いアスファルトに部分的なグラデーションがかかっている。

どうして女子大というと、建築のデザインまでこうも幼稚になるのか……、と少し思ったが、それは、自分の先入観……、なんとも俗っぽい先入観のせいかもしれないと深く反省する。

駐車場の横の芝生の中にログハウスが建っており、その周囲に、白いロープが張られていた。

すぐ近くにパトカーが二台駐まっている。

正面にあるスモークガラスの白い建物に入ると、子供でももう少ししなもの描けるのではと思えるような、花や動物のモザイク壁が前面に出迎える。天井は中途半端に高く、アクリル製のモビール

のような照明器具がぶら下がっている。おそらく掃除が大変だろう。しかし、鬱陶しいくらい存在感はある。ロビーは間が抜けた吹き抜けの空間で、二階へ上がる階段が右手にあった。その階段だけは普通で、デザインナーの高尚な目が届かなかったのか、なかなか好ましいシンプルなデザインだ。

ロビーの左手の奥に受付の窓があり、〈家庭環境学科事務室〉と書かれていた。犀川は小さなガラス戸を開けて中を覗いた。昼休みなのであろう、事務室には誰もいない。

もう一度、見渡してみると、ロビーに一つだけ灰皿があった。犀川はそれを見つけて、ほっとした。灰皿まで歩いていって、胸のポケットから煙草を出し、ライターで火をつけた。

「犀川先生」女性の声が上がった。

振り向くと、階段を白衣を着た長身の女性が下りてくるところだった。

「犀川先生ですね？ はじめまして、私、杉東と申

します」彼女は犀川に近づきながら言う。

「こんにちは。ちょっと早かったですね」犀川は火をつけたばかりの煙草を見た。「すみません、これを吸わせてもらって良いですか？ 今、火をつけたばかりなんですよ。もったいないですからね」

「え？ ええ、どうぞ」杉東は微笑んだ。

杉東は名刺を出した。犀川は慌てて、肩に掛けていたバッグから自分の名刺を探し出して渡す。

表には横書きで杉東千佳、S女子大学家庭環境学科・助手とある。裏は英語であった。ロブの称号はない。

二人は、ロビーに一つだけあったベンチに座るところにした。

白衣の杉東千佳は、すらりとした美人である。髪は短く、色白の小さな顔に化粧は目立たない。フレームのないメガネをしていた。白衣の下から、細いグレーのジーンズが伸びていて、飾り気のない白いスニーカーを履いている。女性的というよりは、少

年のような印象であった。

「お昼休みですか？ 誰もいないようですね」事務室を指さして犀川がきいた。

「ええ、そうですね。すみません」

「それが労働というものです」

「いえ、お恥ずかしいことです」

「外にパトカーがいましたね。どうしました？」

「ご存じないんですか？ 一昨日の事件……」杉東千佳は驚いた顔をした。

「ああ、すみません」犀川は意味もなく謝ってしまふ。「僕は、テレビは見ないんです。新聞も読みません」

「殺人事件なんです」杉東の表情が曇った。

「へえ。物騒ぶつそうですね。学内で、ですか？」犀川は美味しそうに煙を吐く。

「え、ええ。その駐車場の向こうにあるログハウスです。T大の女子学生だそうなんです、そこで殺されたんです。首を絞められて」そこまで言っ

て、杉東は身震いするように肩を竦めた。

「あの中で？ 見られたんですか？」

「私が見つけたましたの。もう、本当にびっくりしましたわ……。私、血を見ただけで気が遠くなってしまうんです」話をするだけで気分が悪そうである。

「血を見たんですか？ でも……、絞殺じゃあ……」

「え、ええ……」杉東は、曖昧に答えて時計を見る。「あ、先生、もうそろそろ、お時間ですね」

「ああ、そうですね。教室はどこですか？」犀川は煙草を消して立ち上がった。

S女子大の家庭環境学科の三年生に開講される「建築生産史」の授業を、犀川が非常勤講師として担当することになった。これは今年から開講された新しい講義である。今日が今学期の最初の授業の日だった。大学では、このような非常勤講師による授業が多い。他大学の教官や、企業の研究者などが、少ないバイト料で雇われるが、もちろんお金が目的

で引き受けるわけではない。犀川の場合は、同じ講座の教授が海外出張しているためのピンチヒッターであった。

犀川の腕時計の時刻は、一時三分まえである。つまり、それは、日本標準時がその時刻であることを意味する。彼は、毎朝、自分の時計を秒針まで合わせる習慣だったからだ。

杉東千佳は、犀川を階段の方へ案内した。

二階の渡り廊下を過ぎると、一見レストランのような洒落た雰囲気（しやれ）の広い製図室があった。室内の周囲には、建築の模型が沢山並んでいる。教室は製図室のさらに奥だった。

小さなテーブルが付いた椅子が五十席ほど、扇形に教壇を取り囲んでいる。スライド、ビデオ、オーバーヘッドプロジェクトなどの設備が整っていた。犀川は、授業で板書をしない。スライドは使うことはあったが、今日はその用意もない。ただ、話をするだけのつもりである。